

審査講評 日本水大賞顕彰制度委員会 審査部会長 松尾友矩

日本水大賞顕彰制度審査部会より今回の応募状況並びに審査・選考の経緯についてご報告申し上げます。当審査部会は「日本水大賞」を選考するため顕彰制度委員会の下に特別に設置されたもので、水環境・水資源・水文化・水防災等の学識経験者15名によって構成されています。審査は、日本水大賞募集要項に明記されている「日本水大賞の対象範囲」及び「審査基準」をベースにしつつ、さらに必要に応じて各応募された各活動についての追加資料を求めながら厳正に行い、日本水大賞の各賞の候補を選定しました。候補となった各活動は、顕彰制度委員会に報告され、審議に付されて、最終的に日本水大賞及び各賞が決定したものです。

応募状況：

今回の応募総数は266件で、前回は236件でしたので、関係者の関心の高まりを実感させるものとなりました。地域別では、全国各地の46都道府県から応募があり、全国区の行事となっていることが分ります。活動主体別については、学校、個人、団体で増加しています。なかでも小学校からの応募が目立っています。総合学習の尊重といったカリキュラム編成の効果がこのような活動の活発化に現われているとすれば、大変頼もしいことといえます。

審査結果：

本年度の日本水大賞・グランプリの榮譽に輝いたのは「熊谷市ムサシトミヨをまもる会」とその連携団体「埼玉県熊谷市立久下小学校エコクラブ」の活動です。世界中で埼玉県の熊谷にしか生存しない希少淡水魚である「ムサシトミヨ」を守ることに成功しています。この活動では「まもる会」による生息河川環境の保全活動と「ムサシトミヨ」の人工飼育で連携した久下小学校の活動が高く評価されました。

国土交通大臣賞は「株式会社 御祓川」による、御祓川再生事業の活動です。民間まちづくり会社とNPOによるユニークな取り組みで、川の元気を取り戻す一つのスタイルとなる可能性が評価されました。

環境大臣賞は「飯水教育会 自然調査研究委員会」による、科学読み物集「千曲川」の編集・発行の活動です。小中学校の、理科の先生方のグループによる36年に及ぶ継続された活動の成果が評価されました。出版物もレベルの高い興味ある読み物となっています。

厚生労働大臣賞は「水みち研究会」による地下水の水みちを調査する活動です。水循環の上で重要なプロセスである地下水脈を市民レベルで調べたもので、東京都の野川流域における水収支の解析にとって科学的にも重要な情報を提供するものとして評価されました。

市民活動賞は「ニッポンバラタナゴ高安研究会」による溜池の浄化に工夫を加えるなどして、絶滅危惧種となっている「ニッポンバラタナゴ」の保全を進めている活動に決まりました。

奨励賞としては「千葉県立茂原農業高等学校」による谷津田の保全活動、「小出川に親しむ会」による神奈川県の小出川における自然環境教育活動、そして「鴨と蛭の里づくりグループ」による琵琶湖北東部流域水系における50年に及ぶ水環境保全活動、の3件が決まりました。

審査部会特別賞は「ウオータネットワーク」による「水の音源風景」プロジェクトのユニークな活動に決まりました。国際貢献賞は、今年度は該当なしとなりました。

審査講評 青少年研究活動賞 審査部会長 千賀裕太郎

賞の概要と応募状況：

2002年に新設された「青少年研究活動賞」は、20歳以下の高校・高等専門学校生徒による水環境に関する調査活動研究に対して授賞するもので、その受賞者は毎年夏にストックホルムで開催される国際コンテストに日本代表として参加することになります。第1回目の昨年は、埼玉県立深谷第一高等学校が日本代表として世界中からの22カ国、約50名の学生にまじって堂々と研究成果と発表し、惜しくも優勝を逃しましたが審査員の高い評価を得ました。国際コンテストに参加した生徒達は、厳しい審査員の質問にも的確にこたえ、またそれぞれ各国の同年代の仲間たちと親交を深め、今後の成長に得難い経験となったようです。

さて幸い今年も、昨年と同数の12件（東北1件、関東3件、近畿2件、中国4件、九州2件）の応募がありました。このうち、昨年に引き続いて応募してきた学校が5件、日本水大賞にも同時に応募している学校が2件ありました。

審査経緯：

審査は、水部門の専門家5人からなる審査部会において、国際コンテストの審査基準に従って厳正に行われました。この基準は、関連性（水環境がかかえる重要な問題に取り組んでいるか等）、創造性（問題提起や問題解決の方法、実験・調査やデータ解析の方法に創造性がみられるか等）、方法論（明確な問題意識のもと作業計画が適切であるか等）、テーマに関する知識（既往研究のレビュー、参考文献、適切な情報源、用語の理解）および実的な技術（生徒自ら測定や実験機材を作成したか、展示物の作成を行ったか等）の5項目からなり、審査員がそれぞれの専門的見地から行った審査の結果を持ち寄って慎重に審議して授賞案を選考し、これをもとに「日本水大賞顕賞制度委員会」において入賞が最終決定されたものです。

審査結果：

第2回の青少年研究活動賞に輝いたのは、山口県立厚狭高等学校の「低酸素濃度に対するメダカとカダヤシの耐性について」です。この学校は昨年度に青少年研究活動特別賞を受賞しており、昨年度の研究内容をさらにブラッシュアップして応募してきたものです。メダカは1992年に環境省が絶滅危惧種としてレッドデータリストに掲載されて以来、とりわけ日本の陸水域を代表する小動物として国民の関心を集めています。メダカの減少の原因としては、水田・水路からなる農村の水辺ビオトープの改変に加えて、外来魚種であるカダヤシの影響があると考えられておりますが、実証的な調査研究は不十分で、メダカの生息へのカダヤシの影響はまだ解明されておられません。この研究は、温度、水質、水温、流速などの環境条件の変化への影響についてメダカとカダヤシとで詳細に比較したもので、“カダヤシが増えてメダカが減少した背景には、両種の生育環境の違いがあるだろう”という専門家（佐原雄二教授）のこれまでの仮説を裏づける最初の大きな一石を投じた秀逸の研究と評価されました。

審査部会特別賞を受賞した大阪府の私立清風高校は、やはり絶滅危惧種であるコイ科魚類のニッポンパラタナゴの卵や仔魚を保護する淡水二枚貝ドブガイの成長と食性との関係を、大量のデータの取得と緻密な観察から明らかにしたことが高く評価されました。

同じく静岡県立浜松湖南高校は、浜名湖上流にある佐鳴湖の水質悪化の主な原因が、潮汐による佐鳴湖下流からの汚水の逆流にあることを詳細な調査で突き止めて、佐鳴湖下流地域の下水道整備の必要性を示しました。地域の水環境の具体的改善提言にまで及んだ研究成果が高く評価されたものです。